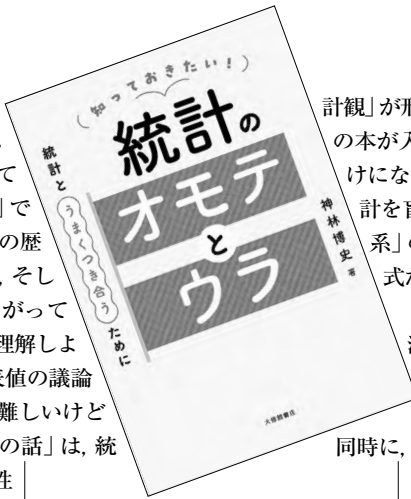


本書は統計(学)の初心者を想定して執筆されたテキストであり、4つの章から構成されている。「第1章 統計って何だろう」では、統計とは何かから始まり、その歴史やどこで役に立っているのか、そして統計リテラシーへと話題は広がっていく。「第2章 統計数値の特徴を理解しよう」では、いわゆる統計学の代表値の議論が展開される。「第3章 ちょっと難しいけど大切な『データの質』と『関係』の話」は、統計分析の元となるデータの妥当性と、相関と因果との混同について中心に議論されている。「第4章『良く見せたい』の落とし穴」では、データの可視化と解釈の仕方について、近年の科学的議論を踏まえた話を展開している。

本書の大きな長所は「統計(学)を利用する・読み解く上で重要なことをバランスよく紹介している」という点である。この長所があるからこそ、統計初心者にはぜひ最初の一冊として本書を手にとってほしい。

統計(学)の初心者向けテキストは評者の見立てでは大きく3つの流派に分かれる。1つ目は本書の第1章でも触れられている「統計ヤバイ系」である。いかに統計学が人をだますか、という点を強調した書籍である。2つ目は「統計学スゴい系」である。統計学を利用してよいことがあった事例を強調して、統計学のメリットに重心を置くテキストである。3つ目は「やさしい統計学系」である。ここでは事例は特に登場せず、統計学の数学的な説明をかみ砕くことに重点がおかれている。

いずれの流派も大事なことを伝えていることには違いない。しかし、それぞれ強調点が異なっている。誤解を恐れず述べればバイアスがあるのだ。初心者にとってすべての流派の本を読むのは難しい。そうすると、最初に触れた本の流派によって「統



知っておきたい! 統計のオモテとウラ

統計とうまくつき合うために

神林博史 著

大修館書店
2023年
四六判, 200頁
1,800円+税

計観」が形成されがちである。「ヤバイ系」の本が入口なら統計にただ警戒するだけになり、「スゴい系」の本を読めば統計を盲信するようになり、「やさしい系」の本を読むと結局無味乾燥な数式だった、という印象になりがちだ。

本書はそのような中で、この3流派のバランスが非常に絶妙である。人をだますような統計の使用法について説明すると同時に、自らもその過ちを犯しうる、

ということを教えてくれる、という意味では「ヤバイ系」の部分もある。その一方で、「統計を使えばこういうことも見通せる」ということも教えてくれる「スゴい系」の側面もある。また、分散などの数式には解説をつけているのは「やさしい系」の成分も少数ながらある。初学者が学ぶべき点をバランスよく取り入れているのは本書の良い点である。

くわえて、そのバランス感覚は統計学を実践する際にも提示される。統計を利用すれば無条件で「客観的だ」と思いが

ちである。しかし、統計学を用いる人間は、自分も含め、多分に主観的な側面を含むことに留意する必要がある。本書では、そのような統計に向き合う姿勢も教えてくれる。

さらに、著者の楽しい筆致が読者を飽きさせない。著者は定評のある『1歩前からはじめる——「統計」の読み方・考え方』も執筆しており、その筆さばきは本書でも発揮されている。読者は楽しみながら読み進め、面白さに引き込まれつつ読み終わると、統計(学)の入り口を一步超えているのである。

本書は「統計(学)を知りたい」と思う人に迷いなく進めることができる入門書である。